The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近世日本海運史の研究
Author(s)	上村, 雅洋
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39190
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	上村雅洋（うえむら まさひろ）
博士の専攻分野の名称	博　士（経済学）
学位記番号	第　11589　号
学位授与年月日	平成6年11月1日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	近世日本海運史の研究
論文審査委員	（主査） 教授　宮本　又郎 （副査） 教授　竹岡　敬温　　教授　佐村　明知

論文内容の要旨

江戸時代は交通・輸送史の観点から見れば，船の時代であった。沿岸海運と河川水運とによって張り巡らされた交通のネットワークによって，全国的規模での商品流通，市場形成が可能になったといってよい。本論文は，このような近世海運の経済史的意義に着目し，江戸時代から明治期に活躍した諸地方の海運業の実態を，各地における綿密かつ労の多い史料探索と，緻密な史料分析によって明らかにしようとした密度の高い実証研究である。

本論文は，既存の研究史の整理の上にたって，近世海運史研究の意義と課題，本論文における分析視角を明らかにした序論と，それに続く18章及び結論から成り立っている。全体として，著者は主として3つの視点から近世海運史の研究に取り組んでいる。第一は工学的側面というべきもので，船舶構造，帆走性能，航海技術，海運施設などから近世海運業の発展過程と特質を把握しようとしている。第二は廻船経営の側面で，船舶投資における資本調達，収益性と損益配分，船主と沖船頭との関係，危険分散の仕組み，難船処理，廻船経営の類型（買積船と運賃積船）などの問題を取り扱っている。第三は廻船の航路や積載貨物の詳細かつ大量観察を通じて，江戸時代における商品の流れや，地域間の市場のネットワークを明らかにすることである。

第1章では，各地の著名な廻船の展開過程に言及しつつ，全国的規模での近世海運業の発展過程と諸商品の流通経路について，概観を与え，以下の章で行われる個別分析の導入としている。第2章では，江戸時代における最大の流通物資であった米穀の輸送と関連させて，近世海運の展開過程を明らかにしている。第3章は，讃岐国直島に残されている17世紀末以降約200年間についての海難史料を駆使して，船籍・船舶規模・積載貨物・稼業形態などを分析し，瀬戸内海における商品流通や廻船市場の動向を追究したものである。大坂・摂津・紀伊・讃岐など瀬戸内東部では，複数の大型船を所有する廻船業者が沖船頭を使って他国稼ぎを行うという形態の廻船経営が早くから展開したが，文化期（1804～17）以降になると，周防・安芸・伊予・豊後などの瀬戸内西部においてこれに追随する動きがあり，さらに幕末にいたって北陸・山陰・九州に廻船業の発達があったこと，積載貨物では，初期の蔵米・城米中心から時代を下るに従い，地方特産物の比重が高くなったこと等々の事実が指摘されている。

第4～8章は紀州における廻船を研究対象とする。第4章では，江戸―大坂間の廻船として樽廻船に属していた紀州

廻船（日高・比井・富田の紀州三カ浦廻船）の菱垣廻船への合体（1833年）問題を検討することを通じて，従来からしばしば論じられてきた樽・菱垣両廻船の角逐，後者の衰退原因を新たな視角から考察している。第5章では2つの代表的紀州廻船業者を取り上げ，その出自的背景や経営状況を検討している。第6章は日高廻船の江戸への有田蜜柑輸送を取り扱った章で，輸送実績，経営状況を検討しているほか，海難の危険を分散するため巧みな出荷システムがつくられていたことを明らかにしている。第7章は熊野地方の林産物の輸送を行っていた新宮・鵜殿廻船についての研究である。第8章では風待ち港であった尾鷲に入津した城米船が検討対象とされ，城米輸送の実態が追究されている。

第9章は，幕末・維新期における灘から江戸・東京への酒輸送を検討したもので，その輸送実績や，和船から風帆船さらに蒸気船への転換過程，酒造家による手船化の傾向などが明らかにされている。第10章では，幕末・明治期の赤穂廻船が研究対象とされ，廻船経営の収益状況や，赤穂塩の流通状況を究明している。第11～13章は阿波地方における廻船を取り扱ったもので，個別経営史料を利用して，撫養地方を中心とする商品流通の動向と廻船経営について分析を行っている。とくに，船舶建造および廻船事業における共同出資，損益処分のあり方や廻船事業の収益性を船単位で具体的に検討していることは興味深い。

第14～15章は讃岐塩飽廻船について検討している。瀬戸内海の中央に位置する塩飽諸島では早くから海運業が発達し，織豊時代および江戸時代初期においては朝鮮出兵を含む様々な軍事用役に従事し，人名制と呼ばれる船稼ぎの特権を得たが，軍事用船への需要が減少した17世紀後半以降は幕府直雇いの城米輸送船として西廻り航路において活躍した。しかし，元禄期以降になると城米輸送船としての特権を喪失し，一般貨物用の廻船に変質を遂げたが，諸国廻船との競争により18世紀中葉以降は衰退した。14・15章では，この塩飽廻船の変容過程と，塩飽諸島をめぐる瀬戸内における商品流通の動向や船稼ぎ形態が分析されている。第16～18章は石見・越後・佐渡の日本海側における廻船を研究対象としたもので，各港における寄港船舶の船籍・規模・積載貨物・運賃などを検討し，日本海側における商品流通の動向と廻船経営について論究している。

以上の諸章が地方廻船ごとの分析であったのに対し，最終の「結論」においては，廻船の発展類型，廻船と商品流通，廻船の性能，廻船の損益と運賃，廻船の経営形態，廻船と危険分散，廻船の近代化の項に分けて，研究の成果を総括している。総括にあたっては，近世海運業がハード・ソフト両面において著しく進化し，全国的規模での商品流通を支える大量輸送手段として大きな意義をもっていたことが強調されると同時に，沿岸海運であったことに起因する技術的特性や，商品取引業からの自立を妨げる廻船経営の不安定性が指摘され，近世海運の限界が明らかにされている。

論文審査の結果の要旨

本論文の最大のメリットは，全国各地に散在する海運関係の大量の第一次史料を長年にわたって掘り起こし，それらを駆使して，近世海運の実像を克明に明らかにした点にある。廻船業者の会計帳簿，客船帳，入船帳などの経営史料はもちろん，海難史料など従来必ずしも光があてられなかった膨大な史料を丹念に読み込み，その結果，数々の新らしい事実が明らかにされた。例えば，船舶投資や廻船経営をめぐる共同投資や共同経営，利益配分法のあり方が具体的に明らかにされたことは，日本における共同企業成立史の観点からも興味深いものがあるし，危険分散，保険類似の慣行が予想外に広範に普及していたことが明らかになったことも新しい知見である。また，廻船経営の収益性を，多数の事例から明らかにしたのも大きな貢献である。商品流通史の点から見れば，主として幕府や藩の史料，都市大商家の史料，株仲間関係史料などに依存してきた従来の研究がいわば点と点とを結ぶ形でしか商品のフローや市場のつながりを明らかにしえなかったのに対し，本論文では諸廻船の活動拠点となっている商品流通の地域的結節点における貨物の動きや船舶の航行状況を克明に追うことによって，江戸時代における市場形成の状況を微細に描き出すことに成功している。これらの数々の新しいファクト・ファインディングは，近世海運史や商品流通史における従来の定説にも大きな影響を与えるものであり，その研究史上の貢献は高く評価される。研究方法に関しては実証史学の王道に沿って，史料批判を踏まえた上で，根本史料中心主義を貫いており，分析の信頼性はきわめて高い。

全体としての分析のフレームワークがやや不明瞭なこと，収集された大量の史料から得られる情報をさらに分析する余地が残されていると思われることなど，今後の研究にまつべきところがいくらか残されてはいるが，数々の新しい知見をもたらし，近世日本海運史研究に新たな地平を切り拓いた本論文は日本経済史研究の分野で高い評価を与えられるべき業績であり，博士（経済学）の学位に十分値するものと判定する。